薬史学会通信

No.34　2003年２月

〒113-0032
東京都文京区弥生2-4-16
(財)学会誌刊行センター内
日本薬史学会事務局
Phone　(03) 3817-5821
FAX　(03) 3817-5830

日本薬史学会 平成15('03)年度総会 講演会のお知らせ

と　　き　2003年(平成15)年４月19日(土)午後
と こ ろ　東京大学薬学部記念講堂(文京区本郷)

11:30～　評議員会(別途御案内)
13:30～　総　　会
14:00～　総会講演(入場無料・来聴歓迎・薬剤師集合研修認定制度対象)
　(1)薬史学会：天野　宏 氏
　　「薬剤師と医師が激しく対立した大正期の医薬分業」
　(2)厚生労働省医政局経済課課長補佐：高山　昌也 氏
　　「医薬品産業ビジョンなどの行政の動向」
17:00～　懇 親 会　於：東京大学山上会館(会費：4,000円)
主　　催　〒113-0032 東京都文京区弥生２-４-16
　　(財)学会誌刊行センター内、日本薬史学会事務局
　　TEL. 03-3817-5821　FAX. 03-3817-5830
共　　催　(財)日本薬剤師研修センター

総会講演(2)関連資料

医薬品産業ビジョン―「生命の世紀」を支える医薬品産業の国際競争力強化に向けて

企業の国際競争力維持・向上の必要は、製薬の領域とて例外ではない。一方、医薬品産業は一般の産業にも増して、高い倫理性・信頼性そして透明性が求められている。と言うことは、医薬品産業の発展に、国民の信頼が得られ、医薬品の特殊性への理解が不可欠である、という事を示している。今後より一層の公正な企業行動、開かれた企業体質が求められ、また行政としても、一層、国民的視点に立って施策を進めていく必要がある。

厚生労働省では、昨14年当初より、この課題について検討を重ね、その要旨を発表している。本年４月の総会講演(2)では、当課題の担当者の一人である同省医政局経済課課長

補佐、高山昌也氏から直接にお伺いできる運びとなった。そこで紙面を借りて内容の概略を紹介する。

まず、A４判約50ページの内容を目次から見ると次のようになっている。

Ⅰ．医薬品産業ビジョンの目的と役割
　１．なぜ国際競争力が必要なのか。
　２．魅力ある創薬環境作りと国内資本の製薬企業
　３．医薬品産業ビジョンの役割
Ⅱ．医薬品産業を取り巻く環境の変化
　１．生命科学の飛躍的発展
　２．グローバル化の進展と国際競争激化
　　国内M&A増加や資本市場変化、ベンチャー企業や新しい受託業の興隆、「ゲノム創薬」に向けた研究
　３．急速な少子高齢化での医療費増大
　４．医療に対する国民の意識の変化
Ⅲ．医薬品産業の現状と課題
　１．市場の特徴　市場規模・市場構造
　２．産業の特徴　産業構造・企業規模
Ⅳ．医薬品産業のスパイラル発展の構造
　１．スパイラル発展
　２．10年後の医薬品産業
　３．医薬品卸売業・同小売業の将来像
Ⅴ．医薬品産業政策の基本的考え方
　１．企業自身による戦略的な経営展開
　２．国の役割
　３．イノベーション促進のための集中期間の設定と政策の実施
　４．企業に着目したミクロ面の産業政策
　５．市場に着目したマクロ面の産業政策
Ⅵ．５年以内(集中期間)に行う具体策
　１．政府における取り組みの強化・推進
　　(1) 政府全体としての総合的な対応
　　(2) 関係省庁等での積極的な取り組み
　２．国際競争力強化のためのアクション・プラン
　　(1) 研究開発に対する支援
　　(2) 治験等の臨床研究の推進
　　(3) 薬事制度の改善
　　(4) 薬価制度・薬剤給付の今後のあり方
　　(5) 後発医薬品市場の育成
　　(6) 大衆薬市場の育成
　　(7) 流通機能の効率化・高度化
　　(8) 情報提供の推進
Ⅶ．終わりに

以上の報告書は、日本製薬工業協会・医薬産業政策研究所が行った「我が国の製薬産業―国際競争力の視点から―」(2001年)の分析に依る所が多い旨付記されている。

我が国の医療・医薬界には、日本独特の条件や慣行が多く、諸外国資本が直接に参入することが困難であった。それが地球規模での構造変化も作用して「聖域」は無くなりつつある。この時に当たり、学会として正式に政府施策の当事者による講演は、着目に価しよう。各方面からのご参加を期待する。

◆新刊紹介

伊藤 真次ほか監修：「日本医学のパイオニア（Ⅰ）―明治に育った巨星―」丸善京都出版サービスセンター

273ページ　2,625円(発行・2002・12・4) TEL.075-241-2162

日本人の近代史についての認識は、適切な形容ではないが「半身不随」だと筆者は思っている。理由は、政治、軍事、経済、文芸などの分野では通俗小説にまで書かれ詳細に伝えられながら、近代化にもっと重要な担い手であった筈の科学者の活躍については、野口英

世などごく一部の人を除いて、ほとんど知ることがない。

これは、一つには科学が一般の人々に難解とされていることにあろうが、その障壁を破る最善の方法は、人物誌という興味をひく側面から研究史を伝えることである。今回、その野口も含め医学史のなかの巨星たちの列伝が現れたことを、大いに慶賀したい。いずれもなんらかの意味で衣鉢をつぐと思われる方々が執筆に当たったもので、今後、この領域について啓蒙が進むにつれて、いよいよ価値を高めるであろう。

通読して痛感したのは、大学者たちの強い克己心と使命感である。情報の迅速化に促されて、近年の研究の優先権獲得競争は過当とも思えるが、先人たちの研究活動はあくまでも自発性で進められたものであった。生活の困窮と闘いながら向学の志を貫き、ついに世界的業績をあげられた方々も多く、読後、襟を正さずにはおられない。

さすがに半数以上がドイツ留学の体験を経てきていて、この国が当時、わが国の医学の師表であったことがわかる。なかでたとえば、軟部人類学を樹立した足立丈太郎博士が、系統発生学的に白色人種が優位に立つものではないことを証明しようとした信念があったというのは、明治人の気概を示すものだ。

薬史学としては、創薬の先駆者であった鈴木梅太郎、高峰譲吉両博士に関心が寄せられるが、鈴木博士については本学会会員の山田光男博士が執筆に当たっておられる。鈴木博士がオリザニン発見に至るまでに、米の成分分析など周到な準備的な研究が行われたことを知って、あらためて敬意を深くした。

この本が医学・薬学者やその志望者ばかりでなく、ひろく一般に読まれることを切望する。同時に、(1)とされているので、続編が公刊されることを期待したい。(宮田 親平)

米田　該典 著　「大阪とくすり」

大阪大学出版会　161ページ　1,500円(発行・2002・3)

薬業界では「くすりの市場」といえば、古くから「東の本町」、「西の道修町」が常識と言っても過言ではない。本書は、「洪庵のくすり箱」の姉妹版ともいうべき著作で、大阪の道修町を中心とした日本の薬事情の発展史である。

本書は、冒頭に日本書紀を引用して、414年に新羅から医師・金武が朝貢大使として来日して允恭天皇の病を治し、459年雄略天皇の時には高麗の医師・徳来が来日して難波に住んで医業を行い「難波のくすし(医師)」と呼ばれた。次いで553年に百済から医師とともに「採薬師」も来日したと、わが国に「くすり」が当時の日本のみやこともいうべき難波に初めて伝来したとその経過を述べている。

その後、難波の地には聖徳太子が四天王寺(大阪市天王寺区)を開き、そこに悲田院を建てて大衆治療が施されたが、その役割は医薬に関する技術を勧め、医薬学の知識を推進した。医療のような高度の技術者は渡来人の「難波のくすし」が指導した。756年には東大寺・正倉院に光明皇后から聖武天皇の遺品とともに60種の薬物が献納されたが、このようにわが国の薬の歴史は、古く西から始まった。

大阪の町づくりは中世末から近世初期に始まり、豊臣秀吉は大阪城を築き、城下町に京都、河内、堺から町人を移り住まわせ、経済を主体とする大阪の町造りを計画した。人口も18世紀半には40万人を越え、健全な町として維持するために疾病対策、患者の救済が課題となって医者の集中が必要になった。この頃、大阪の蘭学が発達し、特に天文学、医学

が盛んになった。1838年(天保9)創立の蘭学塾(適塾)もその一つであった。

本書では、以上のように大阪・道修町を中心とした西の「くすりの町」成立の歴史を豊富な史料を引用しながら、読みやすい物語風に述べている。(M.Y.記)

日本薬学会第123年会(長崎)薬史学関係ポスター発表

薬史学　3月28日(金)(14:00～17:00)〔28【P2】Ⅱ－〕
場　所：長崎県立総合体育館・サブアリーナ

514 近代日本医薬品産業の発展その18
日本に見られた抗菌薬キノロン薬の変遷
([1]大日本製薬、[2]日本薬史学会)○竹原潤[1]、山田光男[2]

515 医薬品添付文書の比較―1950年代と2000年代(その2)
(東京海道病院薬)○五位野政彦

516 漢方医の貢献した日本住血吸虫症認識の歴史と対策に関する研究
(北里大学医学部[1]寄生虫学、[3]病理学、[4]生化学、[2]同大学薬学部薬用植物園)
○牧純[1]、児嶋脩[2]、久米光[3]、桑田正広[4]

517 古方派と称される医師群の我が国の薬学における役割　(昭和大薬)○塩原仁子、冨岡貢、磯田進、伊田喜光

518 宮内庁より移管を受けた生薬標本について(1)　([1]国衛研、[2]薬剤師研修セ)
○江崎勝司[1]、佐竹元吉[2]、合田幸広[1]

519 江戸期牛科撮要と牛医書から見る牛治療薬に関する研究　([1]上宮太子高、[2]藤井寺工業高、[3]四天王寺羽曳丘高、[4]東住吉高、[5]富田林高、[6]農芸高、[7]東大谷高、[8]畠山獣医科)○高倉弘士[1]、眞銅智之[2]、畠山有理[3]、乾真由美[4]、松井桃子[5]、宮本如奈[6]、西谷侑香[7]、畠山朋子[8]、畠山光弘[8]

520 日米の掛け橋になった星―刊行によるニューヨーク新聞「日米週報」
(星薬大)○三澤美和

日本薬史学会平成15年度年会予告

日本薬史学会・平成15年度秋季年会開催について、次のように決まりました。

月　　日：平成15年11月15日(土)
会　　場：東京都品川区旗の台1-5-8　昭和大学 上條講堂
東急池上線・大井町線「旗の台」下車

一般研究発表申し込みについて

申 込 方 法：研究発表演題、研究者氏名(講演発表者に○印)、住所を記した書類に、申込み受理返信用「郵便葉書」を添え、下記の申込み先に郵送下さい。
(論文要旨記述用所定用紙などを送ります)
申込締切日：平成15年6月25日(水)　(発表論文要旨提出は、平成15年9月末の予定)
申　込　先：〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16
(財)学会誌刊行センター内、日本薬史学会事務局